

## 鳥取藩主池田家墓所の成立過程

伊藤 康晴

## The history of the Ikeda clan graveyard, the feudal lords of Tottori

Yasuharu ITO

## はじめに ～考察の範囲とその方法～

本稿は鳥取市国府町奥谷にある国史跡「鳥取藩主池田家墓所」の成立過程を明らかにしようとするものである。現在の池田家墓所は、明治維新时期までに形成された墓域に、昭和初期、東京池田家の菩提寺などから多数墓石が移築され成立した墓所である。昭和期の改葬・移築については、従来余り問題にされることがなく今日に至っていると見える。本稿では、それら墓域・墓石群の構造変化を明らかにして今後の池田家墓所研究に資したい考えである。

考察の主たる対象は、池田家墓所の歴代藩主・夫人・子供のほか、東館、西館と称される分知家歴代藩主とその家族の墓石、七十八基で構成される墓石群とその墓域（164頁【図2】エリア1～5）で、通称「西谷」（A区）および「東谷」（B区）と称する範囲である<sup>1</sup>。当地からやや離れた僧侶や側室（上野氏）、家臣（和田氏・大坪氏）らの墓域は、昭和期に改葬された墓石が移築されていないエリアであることから本稿では対象外にしている。また墓所内には、墓石以外にも各藩主の年忌法要に側近藩士らが奉納した二百六十をこえる石灯籠や一部供養塔などを残しているが、こちらも基本的には考察の範囲外になる。

七十八ある墓石の整理番号（ナンバリング）については、史跡鳥取藩主池田家墓所保存会が平成十六年（二〇〇四）に発行した『国史跡鳥取藩主池

田家墓所保存整備計画書』<sup>3</sup>にある番号を共通に使用させていた。末尾の【墓石総括表】ほか、本文中の墓石を示す番号はすべてこれに準拠している。

池田家墓所は藩祖池田光仲（興禅院）の死去にともなう元禄六年（一六九三）の墓所造成に始まり、翌年に墓所管理の基本原則「奥谷御廟所定書」を定め<sup>4</sup>、同八年三回忌を過ぎて墓塔を造立する。光仲墓の造営に関与した泉州石工や石普請の内容については、既に本誌『鳥取県立博物館研究報告』57号（二〇一〇年）<sup>5</sup>にまとめていたので、ここでは繰り返さない。また池田家墓所に關する近年の研究史についても同様に割愛させていただいた。

今日の「鳥取藩主池田家墓所」は、藩祖光仲から十一代藩主の墓所造営による墓域の拡張により基礎構造が形成されたものである。明治十年（一八七七）に死去した最後の藩主十二代池田慶徳以降は、江戸の菩提寺、弘福寺の池田家墓所に葬られたので、奥谷池田家墓所には今も墓石はない（後述）。江戸時代の歴代鳥取藩主は、江戸で死去した場合でもその遺骸は国元まで移されて奥谷池田家墓所に葬られた。しかし八代齊稷のみは遺命により弘福寺に葬られ、国元の奥谷池田家墓所には歴代藩主と同様規模の墓所を造立して遺髪が埋葬された。

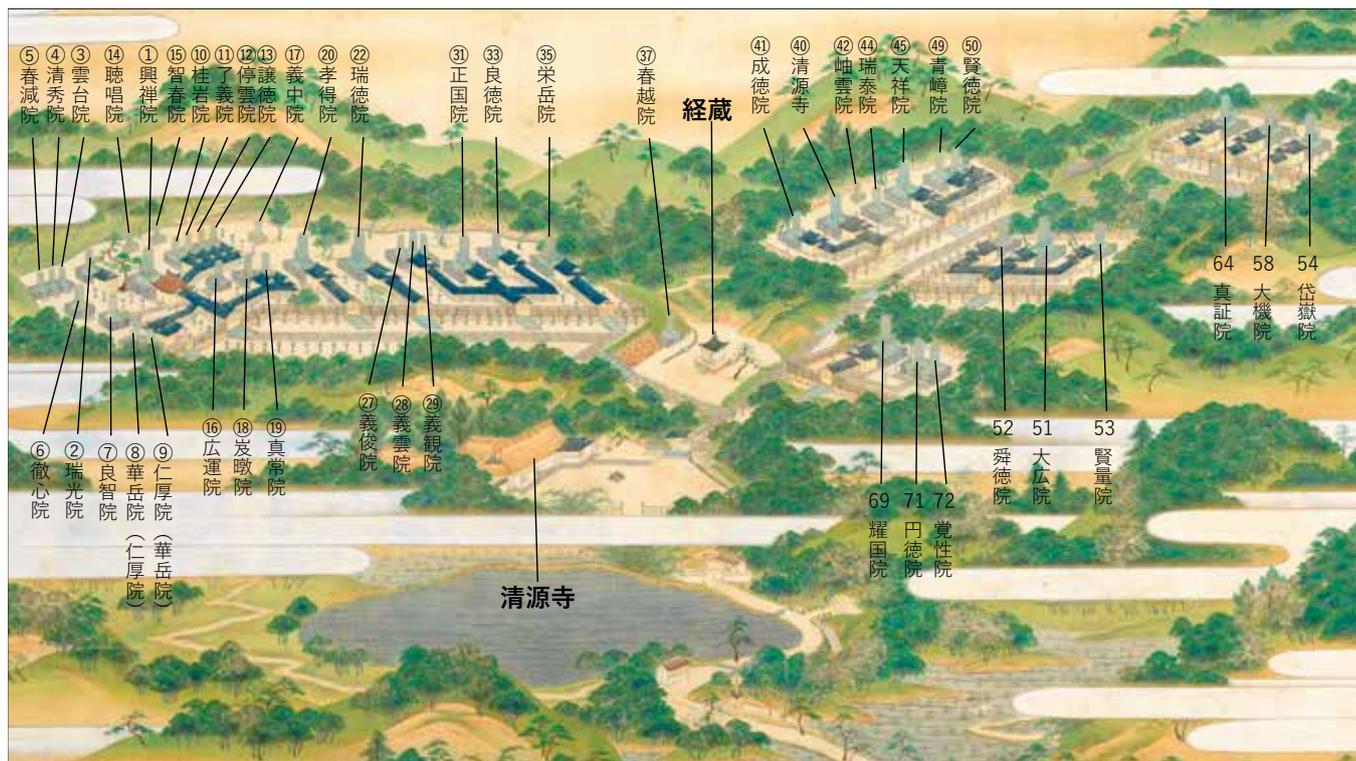


図1. 「御廟所絵図」(部分) 鳥取県立博物館蔵

本稿は江戸期から昭和期に至る池田家墓所の構造変化、とりわけ墓石の移築について検討することから、まずは池田家墓所の原初的な構成を把握する意味で、幕末期に描かれた「御廟所絵図」をたよりに墓域と墓石群を確認する。なお江戸時代の池田家墓所は「御廟所」と称されたが、本稿では原文書の表記とは別に、以下「池田家墓所」(あるいは「奥谷池田家墓所」と表記する)。

#### 幕末期の「御廟所絵図」とその後

【図1】は幕末期・元治元年(一八六四)十月十四日に「奥谷御廟所御山絵図面御用」を命じられた絵師大岸探海による「御廟所絵図」である。同年ないし翌慶応元年(一八六五)には成立したと思われる。本絵図は着彩図で、描かれている墓碑面には、法名を省略して院号のみを金字で記している。また絵図には霊廟・回廊を描くが、現在の墓所にはそれら木造建築は残っていないことを確認しておく。

描かれている墓石群は、元治元年六月二十八日に鳥取で死去した分知家の東館池田家九代の池田仲立(良徳院)までの四十四基であるが、実際には、その後も藩主生母や夭折した子供六霊の墓が造営されている。最後の被葬者は明治五年(一八七二)四月二十六日鳥取で死去した十代藩主慶行の生母、寿仙院(若林松子)である。池田家墓所の藩政時代の流れを汲む墓域形態は、寿仙院の墓石建立をもって一つの節目としてよいだろう。この段階の墓石一覧を【表1】として掲げておく。

墓石は全部で五十基。現在の墓石数(全七十八基)の約64%にあたる。五十基のうち二基、すなわちNo.6池田澄古の墓石は昭和二年(一九二七)に、No.69八代藩主池田斉稷の墓石は昭和五年に改葬して遺骨を墓地に納めたとされるが、両者とも当初より奥谷池田家墓所に墓塔が造立され、絵図にもあることから【表1】に含めている。

これら国元における墓石の建造について、分かる限りでいえば、初代光伸(興禅院No.1)の墓石は、泉州石工が鳥取藩領の用瀬(智頭郡用瀬村)の石材を使用して鳥取で製作し、三代吉泰(天祥院No.45)の墓石は大坂の石工が同地周辺の石材で製作した。しかし四代宗泰(大広院No.51)の時は、用瀬の石が大坂石より堅固な点が再評価されて用瀬石が採用された。以降、池田家の墓石の多くは「家老日記」(控帳)などに散見されるように、鳥取藩

表 1

No.	被葬者	本枝・代数・続柄	法 号	没年月日	西暦
1	池田光仲	初代藩主(池田忠雄長男)	興禅院殿俊翁義剛大居士	元禄6年7月7日	1693
2	清弥	初代藩主七男	瑞光院殿廓心道省大居士	享保元年11月6日	1716
3	安之助	東3代仲庸男子	靈台院殿桃天空智童子	宝暦7年2月26日	1757
4	勝之進澄矩	東初代仲澄男子	清秀院殿貞山義節居士	享保6年6月24日	1721
5	邦子	東2代仲央女子	春滅院殿玉梅元洞童女	享保20年2月11日	1735
6	澄古	3代藩主養弟	徹心院殿義峯浄透大居士	享保12年10月7日	1727
7	池田定興	西6代(西5代長男)	良智院殿慈眼門明大居士	文化4年11月3日	1807
8	池田延俊	東5代(西3代二男)	仁厚院殿礼容玄智大居士	明和8年3月7日	1771
9	金三郎央章	東2代仲央二男	華岳院殿秀林義英居士	宝暦2年5月9日	1752
10	池田清定	西初代(初代光仲四男)	桂岩院殿心月浄空大居士	享保3年9月9日	1718
11	池田定賢	西2代(西初代養子・東初代仲澄四男)	了義院殿自得浄證大居士	元文元年9月7日	1736
12	池田定常	西5代(西4代養子・旗本池田半蔵二男)	停雲院殿冠山兀叟大居士	天保4年7月9日	1833
13	池田定保	西7代(西6代二男)	讓徳院殿義山全智大居士	弘化4年7月17日	1847
14	豊之助就高	西2代四男	聴唱院殿勇嚴義豊居士	宝暦3年4月晦日	1753
15	和三郎	西5代五男	智春院殿門覚貞鏡大童子	文化6年2月24日	1809
16	池田定就	西3代(西2代長男)	広雲院殿文英浄芳大居士	寛政2年2月5日	1790
17	市之丞庸熙	東2代仲央男子	義中院殿融慧日負居士	宝暦4年正月19日	1754
18	池田仲央	東2代(東初代二男)	岌岌院殿活空徹女大居士	宝暦3年正月11日	1753
19	池田澄時	東6代(東5代養子・5代重寛三男)	真常院殿本覚浄光大居士	天明5年7月21日	1785
20	池田治忍	5代藩主長男	孝得院殿故拾遺本然自性大居士	天明元年7月4日	1781
21	若林松子	東8代仲律側室(10代慶行実母)	寿仙院(若林松子)	明治5年4月26日	1872
22	池田齊訓	9代藩主	瑞徳院殿智覚良温大居士	天保12年5月16日	1841
25	鎔姫	12代藩主長女	玉鎔院殿麗質含瑛童女	明治2年6月晦日	1869
26	七雄麻呂	12代藩主七男	義雄院殿久山稚松童子	慶応3年9月5日	1867
27	五緯麻呂	12代藩主五男	義俊院殿英智幻馨童子	元治元年6月10日	1864
28	新次郎	12代藩主長男	義雲院殿桂山道郁大童子	安政6年9月5日	1859
29	四夔麻呂	12代藩四男	義観院殿勇山元秀童子	元治元年5月10日	1864
31	池田慶行	10代藩主	正国院殿純徳玄明大居士	嘉永元年6月13日	1848
32	池田悦子	東9代仲立四女	玉蓮院殿喜悦遺芳童女	明治3年4月7日	1870
33	池田仲立	東9代(東8代三男)	良徳院殿仁衍智栄大居士	元治元年6月28日	1864
34	隣姫	12代藩主養女(東9代仲立女)	玉隣院殿[不明]	明治3年4月2日	1870
35	池田慶栄	11代藩主(加賀前田齊泰二男)	栄岳院殿穆雲光澤大居士	嘉永3年5月23日	1850
37	中川房子	東初代仲澄側室(東2代仲央実母)	春趨院殿妙詠月照大姉	元禄12年正月23日	1699
40	池田綱清	2代藩主	清源寺殿良宗常温大居士	正徳元年7月4日	1711
41	池田仲澄	東初代(初代藩主二男)	成徳院殿健岩道亨大居士	享保7年6月2日	1722
42	鑑子	3代藩主二女	岫雲院殿心浄無童女	享保5年10月28日	1720
44	池田定得	西4代(西3代長男)	瑞泰院殿善倫為室大居士	安永2年6月3日	1773
45	池田吉泰	3代藩主	天祥院殿機運衍徳大居士	元文4年7月23日	1739
49	池田仲庸	東3代仲庸(東2代長男)	青嶂院殿雲外弘庸大居士	宝暦8年6月12日	1758
50	池田澄延	東4代(東3代長男)	賢徳院殿英山衍雄大居士	明和16年9月11日	1769
51	池田宗泰	4代藩主	大廣院殿義山衍隆大居士	延享4年8月21日	1747
52	池田仲律	東8代(東5代二男)	舜徳院殿浄質穆興大居士	嘉永3年3月11日	1849
53	池田仲雅	東7代(東5代養子・5第藩主重寛六男)	賢量院殿接翁義峻大居士	天保12年6月24日	1841
54	池田重寛	5代藩主	岱嶽院殿祥雲洪澤大居士	天明3年10月12日	1783
58	池田治道	6代藩主	大機院殿賢翁紹雄大居士	寛政10年5月6日	1798
64	池田齊邦	7代藩主	真証院殿徳成義栄大居士	文化4年7月9日	1807
69	池田齊稷	8代藩主	耀国院殿峻徳光隆大居士	文政13年5月2日	1830
71	池田清直	西8代(東7代仲雅八男・西7代養子)	円徳院殿仁山道義大居士	安政5年8月6日	1858
72	池田清緝	西9代(東8代仲諒長男・西8代養子)	覚性院殿崑山元勇大居士	文久2年8月24日	1862
78	八千麻呂	12代藩主八男	池田八千麻呂	明治3年8月15日	1870

お抱えの石工棟梁竹村氏らにより、用瀬村周辺まで出張し(「引越」とある)、同地周辺の石材で墓石を製作した<sup>10)</sup>。それらの墓石石材はもちろん個体差は認められるのであるが、多くはやや薄紅色をおびた白色系の花崗岩という印象である。

文字を明確化するためと思われるが、江戸後期以降の記録にみえ、明治期に入りやや様式に変化があるも、旧慣は一定程度継承されているのがわかる。例えば十代慶行の七年忌に伴う修繕の内容については、「興禅寺儀、正国院御石碑文字箔損し候付、御修復」を願ひ出たが、御作事方の取調の結果、「格別之儀ニも無之ニ付」この度は見合わせて、「洗磨漆喰付直し」だけが了承

### 明治時代の墓所修繕

本稿は昭和期の改葬による構造変化を中心に扱うものであるが、本論全体の主旨から、明治時代に実施されている改修工事についても僅かに触れておく。

明治期池田侯爵家の合議組織の議事録「池田家協議会決議録」<sup>11)</sup>明治二十七年三月十七日に協議された議案第十二号では、二四八円余を以て池田家墓所の修繕を決議している。修繕の内容は以下である。

石碑石灰漆喰剥落ニ付、更ニ耐久ノ計画ヲ以テセメント漆喰ニテ修繕、廟門内道路敷石ハ従来、栗石詰之処、除草方頗ル困難ニ付、更ニ切石ニ改修ノ義伺出候処、近來旧御領地人民及各県人ノ拝観者モ不尠趣、加之御墓地ニ頗ル景色ヲ添、将来ノ御為メ宜敷ニ付特ニ御認可相成度候也

増加傾向にある拝観者の「将来ノ御為メ」に墓所を整備したことがわかる。冒頭の「石碑石灰漆喰剥落」とは、墓碑正面の法名などの刻印部分に年回忌ごとに入れられる箔や漆喰のことで、

されたとある<sup>12</sup>。七年忌はまだ「箔」の補修レベルではないということであるか。

これらの修繕記録を見る限り、少なくとも墓塔正面の法名などの彫込凹部はそのままの状態ではなく、「箔」や「漆喰」が入れられて維持管理されていたことはわかるが、その技法や作法については必ずしも明瞭ではない。藩の墓石に対する保全や作法に関わる事項として重要だが、不明な点もあり今後の課題となる。保全の周期としては、歴代藩主の年回忌の扱いを見ていくと、十七年忌<sup>13</sup>・二十五年忌<sup>14</sup>も同様に簡易な洗磨漆喰の修復である。一方、十三年忌<sup>15</sup>・三十二年忌<sup>16</sup>・五十年忌<sup>17</sup>・百年忌<sup>18</sup>は「箔入替」が受け届けられているのがわかる。

明治期改修の核は参道である。江戸期以来、「栗石詰」だった廟門内の道路は、この時にすべて「切石」に敷き替えたことが理解される。現在、長方形に揃えられたやや青味がかつた凝灰岩系の敷石は、明治二十七年の改修工事で整備された可能性が高い。また二日後の協議では議案十四号として奥谷墓所の休憩所や不浄所（便所）の修繕費支出が認可され付帯施設の整備にも着手している。管理し易く、快適に利用できる空間へ大規模に改修されたことを認識する必要があるであろう。

明治時代中期、旧大名家の墓所を一般に開放し、いわば史跡として池田家自らが将来のために整備している点は注目される。昭和四十五年（一九七〇）の鳥取県史跡、同五十六年の国史跡につながるもので、歴史上の重要施設であることはもとより、公衆の憩う空間としての整備がなされているのであり、池田侯爵家の先見があることを確認しておきたい<sup>19</sup>。

## 昭和二年の改葬

東京牛島にある旧鳥取藩主池田侯爵家の菩提寺弘福寺の墓所は、大正十二年（一九二二）の関東大震災で被災し、その後の都市計画に伴って移転の止むなきに至ったという<sup>20</sup>。同所の墓石は昭和二年十一月以前に同墓地を発掘したうえ火葬に付し、弘福寺に遺骨を仮安置していたという。昭和二年十一月二十日の「因伯時報」には、池田家鳥取事務所の監督となった西村重久が弘福寺の墓石を移築するため墓地の工事に対処していると報じていること<sup>21</sup>から、既に事前の工事に着手されていることが理解される。

このほど改葬されるのは十一基であるとし、それぞれの霊位を明記してい

る<sup>22</sup>。それを一覧にしたものが【表2】である。江戸中・後期の側室と子供が大部分であるが、十二代藩主池田家慶徳の側室No.30池田浪子（野本氏のち池田姓）のみ近代のもので、池田家墓所の中では最も新しい。分知家東館から三代藩主となった吉泰の弟、澄古の墓石は、先述したように死去後、奥谷に墓所を造立している（図1-⑥）、遺骨のみを運搬したものである。

遺骨の移送に際しては、十一月二十一日、弘福寺墓所において十一霊の「奉還奉告」を執行したのち、同日午後七時三十分東京駅発。二十二日午後三時過ぎに鳥取駅に到着したのち、宇倍野村奥谷の池田家墓所に移し、到着次第に改葬式をおこなった。埋葬は二十二〜二十五日まで行い、建碑も二十五日までにして終了したとされる<sup>23</sup>。十一月二十五日の「鳥取新報」は、当年の改葬を次のように報じている。

池田侯（仲博）は目下健康上旅行不可能であり、また御令息方（徳真ほか）は何れも目下学校在学中のため、是また長途旅行相成かね、同家協議員小林中将は侯爵御名代として来鳥、御発掘並に今回鳥取御移霊の儀を鄭重に御祭儀ありたるが、何れ一・二年内に奥谷に於いて改葬祭を執行せらるる筈であると、尚今回御改葬となつたのは御一方にて、多く御幼少のお子方並に御生母の方にて御夫人方の御移送はなき由である。

当年の墓所改葬には池田家の立ち会いはなく、正式な改葬式は一・二年の内に執行

表2

No.	被葬者	本枝・代数・続柄	法号	没年月日	西暦
6	澄古	3代藩主養弟	徹心院殿義峯淨透大居士	享保12年10月7日	1727
23	吉之丞	9代藩主三男	高照院殿夢覺即性大童子	文政9年4月20日	1826
24	高沢須摩子	8代藩主側室（9代齊訓実母）	宝善院殿菱花貞鏡大禪尼	天保12年11月6日	1841
30	池田浪子	12代藩主側室（13代輝知生母）	（池田浪子）	大正4年4月2日	1915
43	米子	3代藩主長女	春暁院殿玉梅淨白大童女	享保4年正月8日	1719
66	松平綱太郎	6代藩主五男道一長男	春馨院殿玉梅智芳大童子	天保4年正月27日	1833
67	賑姫（高子）	6代藩主五男道一長女	皎月院殿梅夢真香大童女	文政5年11月18日	1822
68	善之進	6代藩主三男	玉窓院殿法譽庭霜如幻童子	寛政5年12月15日	1793
75	郁之進	8代藩主四男	秋光院殿幻夢知覚大童子	文政13年7月24日	1830
76	賢子	8代藩主三女	智賢院殿妙音真静大童女	文政2年9月11日	1819
77	栄子	8代藩主二女	暁雪院殿智幻正了大童女	文化12年正月18日	1815

予定としており、また今後の改葬で藩主夫人方の墓石を移送する旨を示唆している。

昭和五年の改葬

第二次の墓地改葬・移転は昭和五年八月下旬である。六月には鳥取県にも通知されたらしく、同十九日に久保鳥取県知事らが奥谷の墓所を事前に視察している。当時の「因伯時報」には「池田家では右の墓を奥谷の墓地に改葬されることとなり墓碑、植樹、築石等全部を奥谷の墓所に移されることとなりその際は仲博侯の令息徳真氏が来県になるとの事で右の場合を予想し昨日奥谷の墓地を視察したのである」と報じている<sup>24</sup>。墓壇を含めた墓碑石材のほか、弘福寺墓地に植栽されていた樹木も移植する予定としている。謂れのわからない樹木でも、墓石付近の植栽は留意が必要であることを示唆する内容である。

改葬に際しては事前に池田家鳥取事務所監督となった梶川栄吉が二回にわたり「因伯時報」に詳細な記事を載せている。この時期の池田家に関する記録はそもそも少ないことから、貴重な記録となっている（末尾の【資料編】に全文を掲載）。昭和五年に改葬した十五霊（柱）を一覧にしたのが【表

表 3

No.	被葬者	本枝・代数・続柄	法号	没年月日	西暦
36	池田整子	11代藩主夫人	(池田整子・宝隆院)	明治12年5月21日	1879
47	敬姫	3代藩主吉泰夫人	宝林院殿蓮国浄香大姉	元文2年6月28日	1737
48	亀子	3代藩主三女	瑤台院殿普明衍廓大姉	元文5年6月20日	1740
55	八十子	5代藩主長女	香樹院殿転英衍華大童女	安永6年8月23日	1777
56	律姫	5代藩主重寛夫人(桑名松平家)	清涼院殿惠潭智照大姉	明和3年5月6日	1766
57	仲姫	5代藩主重寛夫人(御三卿田安家)	聖諦院殿義範如証大姉	安永8年6月2日	1779
59	道興	6代藩主四男	義峰院殿雄林如英大居士	文化2年6月17日	1805
60	道一	6代藩主五男	義徹院殿覚性真勇大居士	天保5年3月25日	1834
61	佃氏	6代藩主側室(8代斉稷実母)	貞成院殿浄節妙嚴大禅尼	文化6年5月12日	1809
62	生姫	6代藩主夫人(仙台伊達家)	輪光院殿蓮邦浄薫大姉	寛政4年6月7日	1792
63	丞姫	6代藩主夫人(紀伊徳川家)	転心院殿実相如幽大姉	文政9年9月2日	1826
69	池田斉稷	8代藩主	耀国院殿峻徳光隆大居士	文政13年5月2日	1830
70	演姫	8代藩主夫人(米沢上杉家)	天珠院殿含月真耀大姉	文政元年5月21日	1818
73	池田斉衆	8代藩主養子(徳川家斉十二男)	英俊院殿雄山全機大居士	文政9年3月9日	1826
74	(観夢院)	8代藩主長男	観夢院殿閃光如電大童子	文化12年正月23日	1815



写真1. 昭和5年8月26日 池田家墓所における移霊祭(改葬式) (鳥取市歴史博物館蔵)

3】である。昭和二年の改葬墓石は側室や幼少期に亡くなった子供の改葬が多かったが、五年の改葬は八代藩主斉稷をはじめ藩主夫人、若殿齊衆など、身分の重い人物の墓が多い。大部分は江戸中・後期の墓だが、明治十二年に没したNo.36池田整子(宝隆院)の近代墓石を含む。今回は池田侯爵家も嫡男徳真を鳥

取に派遣している。徳真の鳥取滞在は八月二十六日(二十九日の四日間であるが、到着した二十六日の午後には奥谷の池田家墓所において、昭和二年には正式に実施していなかった改葬式(移霊祭)を執行する。その時に撮影されたのが「池田家移霊祭」とメモを付す【写真1】である<sup>25</sup>。帽子を手にした徳真の左が久保豊四郎知事。書生を挟んで右が枢密院書記官の村上恭一(鳥取出身)。さらにその右が鳥取市長の楠城嘉一である。

「因伯時報」八月二十七日の記事は次のように報じている。「今回侯爵家において奥谷の墓所に改葬の遺骨は合計十五個で白木の箱に丁重におさめられた右遺骨は他の付随荷物とともに二等車一両買切りで予定の如く二十六日午後二時四十分鳥取駅着、官民多数出迎への裡に直に列車より運び出されるが同列車の停車時間四分間では全部運び出し不可能のため買切車は約一分間発車遅延の見込みであるが鉄道当局では特に従業員を督励して機宜の措置を取る予定であった」<sup>26</sup>。

一般の旅客列車(二等車買切り)において「遺骨」と「付随荷物」が運搬

されたことがわかる。この列車では墓石石材は運搬されていないようである。恐らくは事前に運搬を終え、八月二十六日は遺骨のみが運ばれて埋納されたものと理解される。

なお八代藩主斉稷の墓石は、既に死去当初、奥谷池田家墓所に造立されていたことから、東京から墓石は運搬されなかったものと思われる。弘福寺の池田家墓所及び八代斉稷の墓について梶川栄吉は以下のように述べている<sup>27</sup>。

牛の御前に接した牛島の池田家御墓所は江戸時代を物語る最後の偉観であつた。弘福寺旧境内を道路が貫通するので普通墓地は先年取払はれ、無数の遺骨は発掘され火葬に附して納骨塔に収められ、重なる人々のみ特設墓地に集められて墓表が残された。有名なる池田冠山侯の銘碑、故奥田義人男の墓石等もその中にある。その際同所に多少池田家御家族の方々の御墓も有つたので其は已に奥谷に御改葬に成つた。而し別に一区画を成していた池田家御墓所はまだその儘で有つて、雄大なる耀国院殿の碑石、壮嚴なる慶徳公の墓標、華麗なる歴代御夫人方の御墓は燦然として聳えていた。中にも耀国院殿の御墓の如きは今日之を築造するには三万金を要すべしと或石工がいふたとの話。さすがに卅二万石因伯太守の昔を偲ぶに足るべく、同時に江戸名所の一つで有つたが是も弥々この度御取除けの止むなき事と成り、池田侯爵親しく御立会の上、鄭重に御改葬遊ばされ、去八月一日耀国院殿並に輝知侯の御火葬を最後として一切終了の運びと成り、慶徳公以後の方々の御遺骨は多摩池田家の御墓地に、以前の方々の御遺骨は来る廿六日侯爵御令嗣御伴せられて当地奥谷に納めらるゝ事と成つた。(傍線、筆者)

東京向島の牛島弘福寺の池田家御墓所は、「牛の御前」すなわち牛島神社にかつては隣接していた(牛島神社も同様に近隣に移転)。梶川は江戸時代を物語る最後の偉観であつたと述べている。すでに昭和五年八月以前に「普通墓地」の遺骨は発掘して火葬され納骨塔に収められているとし、最後の火葬は昭和五年八月一日に実施された八代斉稷(耀国院)と十三代輝知であり、池田仲博侯爵立ち合いで実施されたことがわかる。

生前、十五代池田徳真は、自身が火葬に立ち会つたのは「大正十三年八月」で、その時目の当たりにした十二代池田慶徳の遺骸について語っている<sup>28</sup>。

また同氏が昭和五十四年に作成した草稿によれば、大正十三年の「真夏」に「二十三基の墓を発掘して火葬」したとあることから、弘福寺池田家墓所の大部分はこの年に一旦は整理され、土葬墓の遺骸は火葬されたとみられる<sup>29</sup>。向島弘福寺の池田家墓所の埋葬者は、この六年間で数回に分けて火葬されたことがわかる。

梶川によれば、「普通墓地」の遺骨は弘福寺の納骨塔に安置され、身分の重い人々は「特設墓地」に集められて墓表(墓石)が残されたとする。その中には池田冠山<sup>30</sup>や奥田義人<sup>31</sup>の墓石等もあるとし、両者の墓石は現在も弘福寺墓地に残されていることを鑑みると、特設墓地の一部が現存したものであると理解してよいだろう。こうした墓所改葬の過程で確認された「池田家御家族の方々の御墓」は、既に奥谷池田家墓所に改葬されたと述べていることから、これが昭和二年の改葬にあたりと判断される。

梶川は弘福寺の墓所で最も巨大な墓塔が「耀国院殿」八代斉稷のもので、江戸名所の一つでもあつたと述べている。斉稷の墓石は国元(奥谷)の亀跌円頭墓と同様のものであつたかも知れない。さらに留意されるのは明治十年に死去した十二代池田慶徳以後の遺骨は、「多摩池田家の御墓地」すなわち多磨霊園(東京都府中市)の池田家墓地(以下「多磨墓地」と略す)に埋葬されるとし、それ以前の古い遺骨は奥谷の池田家墓所に埋葬するという一応の基準が示されていることである。中には大正四年(一九一五)に死去したのち弘福寺墓地に葬られた池田浪子のように、昭和二年に奥谷池田家墓所へ改葬されている例もある。浪子は池田慶徳の側室で、もと野本氏。実子七男一女を生み、十三代輝知の生母である。後に池田姓となり家族として重んじられた<sup>32</sup>。浪子の墓は、夭折した五人の子供たちの墓の近くに今もある<sup>33</sup>。

#### 城下寺院からの改葬

冒頭で述べたように奥谷池田家墓所は全七十八基の墓石がある。明治五年以前の墓が五十基、昭和二年・五年に東京から持ち込まれた墓石が二十四基。残りの四基は『国史跡 鳥取藩主池田家墓所保存整備計画書』において鳥取城下四つの寺院から改葬されたと位置付けられている墓石で、どれも江戸中期から後期の側室の墓石である。それらをまとめたのが【表4】である<sup>34</sup>。

No.38 五代藩主重寛の側室蓮池院(浅井袖)の墓石がかつて存在した真教寺には、過去帳の確認から、移築年代は昭和二十九年(一九五四)三月のこと

表4

No.	被葬者	本枝・代数・続柄	法号	没年月日	西暦	備考
38	浅井氏(袖)	5代藩主側室	蓮池院殿転譽性岳理園善女	天明元年5月9日	1781	鳥取真教寺より改葬
39	(智明院)	5代藩主側室	智明院妙教日清大姉	明和3年5月16日	1766	鳥取菅能寺より改葬
46	中村氏	3代藩主側室(4代宗泰実母)	真鏡院殿法譽戒観照如大姉	明和4年10月30日	1767	昭和4年、鳥取慶安寺より改葬
65	三宅氏	6代藩主側室(7代斉邦実母)	聳雲院殿貞室浄操大禅尼	文政12年正月14日	1829	昭和初期、岩倉即心寺より改葬

であると判明した。蓮池院は江戸生れで、藩主重寛の五男熊吉(のち駒吉)を生むが六歳で没している。当寺院は二十七年の鳥取大火で被災し、二十九〜三十年にかけて境内墓所を久松山東側の円護寺墓地へ整理移転していることから、同じ時期に蓮池院の墓石も池田家墓所に改葬されたことがわかる。

No.39 五代藩主重寛の智明院の墓があったとされる菅能寺については、伝承なども含めその痕跡をたどることができないのが現状である。菅能寺も真教寺同様、鳥取大火後に円護寺に墓地を整理移転していることから、あるいは真教寺と同じような時期に移転したものであるうか。

なおNo.38 蓮池院・No.39 智明院の位牌については、明治五年三月十九日に各々の寺院より池田家に取り集められていることが確認される<sup>35</sup>。

No.46 三代藩主吉泰の側室(四代宗泰実母)真鏡院(中村氏)の墓石があったとされる慶安寺には、過去帳に戒名が確認され、「池田家墓所に移築した」(年代未詳)という伝承も先住より伝えられている。側室の俗名は不明ながら明和四年(一七六七)享年七十三というから、元禄六年(一六九三)の生れであると思われる。

No.65 聳雲院の墓石があったとされる岩倉村(鳥取市岩倉)即心寺<sup>36</sup>はすでに退転しており、卯垣との村境に近い山裾の跡地は、雑木と竹林が繁茂している。移築年代の確認は難しいが、藩政時代において本寺である興禅寺の取り扱いで三十三年忌(万延元年)には「即心寺御廟所聳雲院様御石碑磨御文字箔入替、并玉垣」などが修繕されている<sup>37</sup>。

このように年月の経過と共に改葬当時のことはわからなくなりつつあるが、これら四基の墓石の移築年代には既に見たように時代差が多少あるようである。二代にわたって池田家墓所の管理をされた奥谷の沖家に

受け継がれた『池田家御墓地明細書』<sup>38</sup>という記録がある(以下『明細書』と略す)。作成された年号を欠くも昭和二年・五年の両度にわたり移築された墓石二十四基(No.6・69を除く)を網羅している。

本冊の記述として着目される点として、移築された二十四基の墓石のうち、二十基について、その石材を「黒色ノ石」と注記していることである。鳥取で造られた墓石は既に述べたように、個体差は認められるものの多くは白色系の花崗岩であるが、昭和期に移築された墓石群は関東で製作された墓石であることを象徴するように「黒色ノ石」である。個々の詳細な石質は未詳ながら概ね安山岩のように観察される。この点については最後に再度触れたいと思う。

『明細書』はやや厚手の野紙に万年筆で書かれているが、その本文にNo.46(真鏡院)・65(聳雲院)は記載されているが、No.38・39は本文にはなく、鉛筆で追記されており、移築が前者二基より後年であることを反映している。真教寺の墓石(No.38)が昭和二十九年の移築であることを考えると、『明細書』はそれ以前、おそらく昭和二十年代半ば頃に作成されているように思われるが、今のところ作者の特定には至っていない。

また前者二基が移築されている墓域は、側室として仕えた藩主墓の隣り(No.46)、もしくは藩主となった実子の墓石の隣り(No.65)である。一方、後者二基は、側室として仕えた五代藩主重寛の墓域ではなく、従来単独で存在した東館初代仲澄の側室中川氏の墓(No.37)の隣りに移築されて現在は三基が並んでいる。西谷(A区)と東谷(B区)の境界付近、かつての経蔵(経堂)の横である。前者(46・65)と後者(38・39)の墓域の相違について、前者の側室は実子が藩主に就任していることから特に重く扱われ、各々縁のある墓域に移築されたものと推察される。後者のうち、蓮池院は夭折した若君(五男熊吉、のち駒吉)を出産しているが、前者の格式に及ばない点において、共に五代藩主重寛の墓域に移築されなかったことが推察される。

#### 多磨霊園池田家墓所への改修

近代池田家墓所の構成要素として、参考までに多磨霊園池田家墓所についても触れておく。多磨霊園の池田家墓所(「多磨墓地」と略す)は、「一区一種一側」の第三番目と四番目枠の合筆区画(二区画)であり(通常は名家でも一区画が多い)、大正十二年に開園した多磨霊園の最も早い時期に取得さ

表5

	名	死去	埋葬
1	慶徳	明治10年8月3日	昭和5年10月3日
2	寛子	明治5年正月25日	昭和5年10月3日
3	輝知	明治23年4月30日	昭和5年10月3日
4	幸子	昭和2年5月9日	昭和2年5月15日
5	徳国	明治19年正月22日	昭和5年10月3日
6	仲博	昭和23年正月1日	昭和23年2月1日
7	亨子	大正12年9月1日	大正12年9月28日
8	知子	明治16年6月11日	昭和5年10月3日
9	輝昶	明治20年11月30日	昭和5年10月3日
10	輝理	大正8年10月25日	大正15年8月2日
11	博章	大正2年12月19日	昭和2年12月4日

資料1

造營関係者	
家令	岸本光次郎
工学士	池田讓次
彫塑家	朝倉文夫
現場監督	遠藤清次郎
工事担当	吉田嘉作
石工	三原三松
	外一同
文学博士	鹽谷温
書家	河邨正憲

れた墓域であることは明白だが、池田家の墓所が具体的にいつ造営されたかは必ずしも定かではなかった。多磨墓所に関する当時の記録は今のところ確認できておらず委細不明であるが、平成十五年（二〇〇三）に多磨墓地の池田家墓所を改葬した際に、巨大なドーム状の墓石の下面から「大正十四年十二月」の紀年銘等の刻印が確認され、造営時期が判明した。

戦後、十五代池田徳真が遺したメモ（年未詳）に「多磨墓地納骨」と見出しを付した記録がある<sup>39</sup>。被葬者を系図にして示したもので「口柱」とある。系図を世代順に一覧化して埋葬年月日を補足したものが【表5】である。

奥谷池田家墓所への第二次改葬（昭和五年八月二十六日）から一か月余り後の十月三日に東京の多磨墓地に慶徳・寛子・輝知・徳国・知子・輝昶の六柱が埋葬されているのがわかる。多磨墓地にそれ以前から遺骨が埋納されていたと思われる方々は、大正八年に死去した輝理（仲博長男）、同十二年に関東大震災で亡くなった亨子（仲博夫人）、昭和二年の幸子（輝知夫人）と博章である。徳真存命中の段階では、昭和二十三年に死去した十四代池田仲博までが被葬者として記載されている。

多磨墓地は十六代池田百合子氏の代で再び改葬される。平成十五年のことである。池田氏は、当代限りで鳥取池田家の系譜が終焉することを見据え歴

代墓所のとりまとめを企図され、当初は「鳥取藩主池田家墓所」に改葬することを望まれたが、「史跡」への改葬は現実的には難しく、結果的に鳥取市立川の旧東照宮別当寺大雲院境内の墓域に受け入れられることになった。この間には、十五代池田徳真（平成五年没）・美知子（同十一年没）夫妻。百合子氏の妹英子（同九年没）の三柱を加え十四柱となった。

多磨墓地は平成十四年十二月より改葬に向けた調査をはじめ、同十五年六月十七日に十四柱の「御骨出し」に着手し早速鳥取に向け出発した。同二十日より本格的な解体工事に着手し、翌七月二十一日に全工程を終了。池田家の墓所区画は更地にされた。

一方の鳥取大雲院側においては、「御骨出し」当日の六月十七日のうちに十四柱の骨壺を受け入れて御霊屋に仮安置された。石材は七月四日より順次搬入して納骨室などの躯体復元工事に着手。工事が進む中で、屏風石（正面に「池田家之塋」と刻むもの）の下面に大正十四年十二月の造営当時の墓石建造に関わった人々の名前も確認された。それが【資料1】である。

岸本光次郎は現在の鳥取市河原町袋河原の出身。明治四十四年（一九一）より池田侯爵家につとめ、大正十年に家扶、同十二年より家令。池田讓次は池田氏一門、福本池田家の末裔で、東京帝国大学建築学科を卒業。大正十四年には大蔵省營繕管財局技師で設計・建築に従事した。彫塑家朝倉文夫は大正時代後半期に東京美術学校の教授に就任するなど日本美術界の重鎮。戦後彫刻家として初めて文化勲章を受章した。塩谷温は漢学者。大正期に文学博士号を授与され東京帝国大学教授となる（のち名誉教授）。河邨正憲は大正期に作例を残す書家。履歴の詳細は不明である。石工三原三松は腕利きの石工であると思われるが、現在のところ履歴・作例とも把握できていない。

大正期の名だたる人々により制作された池田家の近代墓は、地下部の元の納骨室の規模はやや縮小されたが、地上部の造作などは基本的に多磨霊園池田家墓所を大雲院境内に移築して復元されていると言って差し支えないはずである。平成十五年十一月一日に「池田家墓地改修・合祀観音開眼法要」を執行して移転工事を終えている。

これにより鳥取池田家歴代の墓所は、鳥取市国府町奥谷の近世鳥取藩主家の池田家墓所と、近代侯爵家以降の墓地が移築された鳥取市立川の大雲院池田家墓所の二ヶ所にまとまったことになる。

### 奥谷池田家墓所の構造変化（まとめにかえて）

これまで検討してきた明治五年以前の墓石群を基盤に、昭和期に改葬・移築されている墓石に経緯・年代別で色分けしたのが【図2】である（色は表2・3・4と対応）。近世以来の墓域が、どのように変化して今日の「鳥取藩主池田墓所」が成立しているのか、その概要を1〜5のエリアごとに述べてまとめにかえたい。エリアの順序は歴代藩主の墓所造営の順序に従っている。

〔エリア1〕 奥部の元禄六年（一六九三）に造営されたNo.1初代光仲の墓域が、江戸中期以降順次拡張されて幕末に至る。光仲墓の周囲は藩主子女や西館池田家の歴代墓などが比較的早い段階で造営され、空間的にはかなり混みあっている。昭和の改葬墓（表2・3）の中には、光仲墓周囲の埋葬者に類縁の墓石を含まないこともあり当地周囲への改葬は見られない（No.6澄古墓は昭和二年に遺骨を東京から移しているが墓石は当初より造立され絵図にも描く）。

エリア1の中ほど、天折して藩主に就任できなかったNo.20治恕（五代重寛長男）の墓を江戸中期（天明元年）に造営したのち、江戸後期に至ると治恕墓の東側を九〜十一代の墓域に順次造成して拡張していくわけだが、十二代慶徳の子女の墓五基（No.25〜29）は、九代斉訓墓（No.22）の左右に造営されている。それらの墓石は、江戸末期から明治初年にかけて造営されたものであるが、No.35十一代藩主慶栄墓を造営したのち、新規に墓域を確保することが困難であったことから、やや不自然ながら九代周辺に造営されたものと考えられる。以後、エリア1ではヤマを背にして南向きに墓石を建立することが困難であることが【図2】から読み取れる。

昭和二年移築の側室墓三基（No.23・24・30）は、所縁の藩主墓・子息墓の前に建てられ、昭和五年移築のNo.36池田整子（宝隆院）の墓石は、十七歳で死去した夫十一代慶栄の墓の前に建てられている。またエリア1の東側に位置する石垣下には、既に述べたように、江戸期からある側室墓（No.37）と昭和期（戦後）に城下寺院から移築された側室墓（No.38・39）がある。

〔エリア2〕 No.40二代・No.45三代藩主墓のエリアである。墓塔は概ね南向きに建つ。二代綱清墓付近には昭和に移築された墓石はなく、霊廟がない点を除けば江戸時代から変わらない空間となる。一方隣りの三代吉泰墓付近には昭和二・五両年にわたり移築された夫人と女子の墓三基があり、また



写真2. 大正時代前半期頃の池田家墓所（絵葉書其四）  
（鳥取市歴史博物館蔵）

〔エリア4〕 No.58大機院6代藩主池田治道の墓。  
周囲にNo.59〜63、66〜68の墓はみられない。

城下慶安寺より移築された側室墓がある。綱清の墓域とは対照的に吉泰墓周辺は昭和に入り大きく変化している。

元文四年（一七三九）三代吉泰（No.45）の墓域選定に際しては、当時の記録を幾分残している。「外二直場所も無之、清源寺様御廟之先之方可然旨相極メ、山ヲ切平シ候様と関源左衛門江申付、尤此段江戸表ニも絵図を以申上候事」と見え、綱清（清源寺様）の墓域の東側のヤマを切り崩して墓地を拡張したことが理解される<sup>40</sup>。池田家墓所はこのような普請を繰り返して形成された地形なのである。

〔エリア3〕 No.51四代宗泰の墓域で、江戸時代の墓所の環境が最もよく残っている空間である。急峻な山肌を開削しており、大規模な難工事であったことが想像される。墓塔へのアプローチ（参道）は、当墓域の西側下部に付け、東谷（B区）の墓域では唯一、西向きに墓塔が造立されている。

また急峻な谷地形の治水のため、江戸時代より頑強な石造りの排水路があったものと想像される。「御廟所絵図」には谷川の上手と下手には開渠の水流を描くが、エリア3付近から5に流下する水路を描いていない。図像的には描き分けが認められることから、かつてこの部分の谷川は暗渠排水であった可能性がありそうである。

〔エリア4〕 No.54五代重寛、No.58六代治道、No.64七代斉邦の墓域である。北向きに墓塔が建つ。池田家墓所のなかでもっとも高所にあり（標高57m前後）、かつ地形的にも谷奥部の狭まった地点に到達している。これより奥



写真3. 大正時代前半期頃の池田家墓所 (絵葉書其二)  
(鳥取市歴史博物館蔵)

[エリア5] No.69 耀国院 8代藩主池田斉稷。

墓前のNo.75~77、灯籠の陰になるがNo.73・74の墓は見られない。

への墓所造営は避けられたとみられ、八代の墓はヤマの低部(エリア5)に移る。

昭和の改葬では、重寛・治道とも複数の正室墓と天折した子女墓などの墓が移築され、江戸時代以来の空間は様変わりしている。(移築前【写真2】参照) 斉邦墓の前には美母のNo.65 聳雲院(三宅氏)の墓がある。かつて法美郡岩倉村(現鳥取市岩倉)即心寺にあったことを物語るように、通常池田家墓所では見られないお付き女房たちの連名を刻む

手水鉢があり、また墓石の形状も側室にみられる位牌型ではなく無縫塔である。

〔エリア5〕No.69 八代斉稷の墓域である。墓塔は北向きである。当エリアは〔図2〕からも分るように、昭和期に最も変化した空間になっている。明治三年に死去した慶徳八男No.78 八千麻呂の墓石が八代斉稷墓に隣接するのは異例であるが、本来安置されるべきエリア1が既に十二代慶徳の類縁墓石で手狭になった関係からと推察される。

斉稷墓の前面には昭和二年の改葬で斉稷の子女の墓石が移築されているが(No.75・76・77)、昭和五年には重い身分である夫人No.70 天珠院(演姫)の墓石(宝塔型)及び斉稷の養子で藩主になる予定であったNo.73 斉衆(將軍徳川家斉12男)の墓などが移築され、斉稷墓周辺は混み合った空間になっている。

なお大正時代前半期<sup>4)</sup>、移築前の【写真3】には、比較的大きなNo.73 斉衆墓や、子女の墓石(75~77)は当然写っていないわけだが、現在斉衆墓

明治5年以前に造立された墓石
昭和2年弘福寺墓地より改葬された墓石
昭和5年弘福寺墓地より改葬された墓石
昭和期市内寺院より改葬された墓石

凡例



図2. 池田家墓所エリア図 『国史跡 鳥取藩主池田家墓所保存整備計画書』の図を改変

の横には、齊稷の娘勝徳院（繡子）が万延元年（一八六〇）に建立した齊稷の供養塔「大乘妙典石字塔」<sup>42</sup>がある。石字塔も昭和初期の移築と考えるべきであろう。

以上、昭和期の改葬・移築で奥谷池田家墓所の環境が大きく変化したこと述べてきたが、最後に今後の課題も含め石材について触れておく。東京牛島弘福寺より改葬された墓石は、一見して元々池田家墓所にあった墓石（表1の墓石群）とは異なる石材とわかる。既に触れたように「黒色ノ石」である。石材は関東のものを当然使用している。今回は理化学的な調査には及ばなかったが、概ね安山岩のようであり、神奈川県西部から伊豆半島にかけて採石された伊豆石・伊豆堅石などと称される石材が用いられているように思料された。

江戸は近隣に石材資源を持たない土地柄であり、江戸初期から大規模に始まる江戸城石垣普請とその後の都市建設にかかわる石材の調達、すなわち城下の河岸・護岸・橋台はもとより、都市生活に必要な上下水道・社寺建築の石装・石階段、そして大名家の墓石などにも伊豆方面より海上輸送された安山岩が主体的に利用されたことが近年の研究で明らかにされている<sup>43</sup>。弘福寺より改装された表2・3の墓石群も伊豆石の安山岩を主体とした石材であると思われる。かつて弘福寺にあった「江戸名所の一つ」と称された八代齊稷の巨大な墓石は、同時期に国元に造立された白い花崗岩とは対照的に、恐らく黒い安山岩であったはずで、まさに「江戸時代を物語る最後の偉観」であったに相違ない。

池田家墓所は江戸と国元の墓石群が集約された歴史遺産である<sup>44</sup>。その背景には大名家として長く続いた二拠点生活（参勤交代）があるわけだが、かつて江戸にあった墓石が移築されていること、その石材が鳥取の石材と大きな違いがあることは、池田家墓所の歩んできた変化のある歴史でもある。時代の移り変わりと共に大名家の墓石をどのように後世に残していくかということが模索された結果が今日の史跡「鳥取藩主池田家墓所」があることを再認識したい。今後さらに着目され、様々な専門性からの研究が進むことを期待したい。

本稿をなすにあたり、次の方々に大変お世話になりました。記してお礼申し上げます（敬称略）。

池田家墓所保存会・石野石材工業所・菅能寺・慶安寺・真教寺・大雲院・池田百合子・沖俊幸（故人）・沖廣俊（故人）・鎌澤圭伸・未見田博基・谷和奏・永田敬三・永田久美恵・吉村哲・吉村比呂志

## 註

- 1 「A区」「B区」の区分は前掲註1による。
- 2 国史跡鳥取藩主池田家墓所の範囲に、大坪家墓所は含まれていないが、墓所に上がる道と奥谷集落の墓地に向かう分かれ道の分岐点にある。大坪家は二百石の鳥取藩士。大坪家家譜（鳥取県立博物館蔵）や大坪家に伝来した文書（鳥取市歴史博物館蔵）によれば、廢藩以後、墓所（御廟所）の「御廟守」を大坪周蔵・清九郎父子に仰せ付けられている。
- 3 『国史跡鳥取藩主池田家墓所保存整備計画書』史跡鳥取藩主池田家墓所保存会、二〇〇四年。当時は鳥取県教育委員会文化課内に事務局を置く。現在は組織改編で鳥取県地域社会振興部文化財局とつり弥生の王国推進課内にあり。
- 4 『奥谷御廟所定書』（家老日記）元禄七年閏五月十九日）  
定  
一 御廟所并宮之下村辺より、道筋掃除等念入可申付事。  
一 御廟所江猥に人通し申ましき事。  
一 御廟所構山林之竹木、猥に伐取せ申ましき事。  
以上
- 5 閏五月日
- 6 拙稿「鳥取藩祖池田光仲墓所の造立過程と泉州石工」二〇二〇年
- 7 鳥取藩政資料「家老日記」「御用部屋日記」、元治元年十月十四日条  
註2と同様
- 8 鳥取藩政資料「家老日記」寛延元年七月十九日条  
一大広院様御石碑被仰付二付、申談候処、天祥院様御石碑は大坂江申遣し、致出来候得共、此度は用ケ瀬二而被仰付可然旨、太田権右衛門申聞、右用ケ瀬石之儀、大坂二而致出来候二も、差而相替義無之、結句大坂石よりハ堅ク有之旨、其上、興禪院様御石碑も用ケ瀬二而被仰付宜有之、少も鹿抹成儀二而ハ無之旨申聞候二付、相伺候上、猶又申談、当年申又は来年四月比迄二取建候様二、太田権右衛門江可申渡処、不快二而不罷出候付、武田又右衛門ヲ以申渡候事、尤、天祥院様之節も、御三回忌迄二出来、建申候二付、大広院様御石碑も来春迄二出来建候様、申渡候事。
- 9 註2参照
- 10 例えば「家老日記」文政十三年八月十九日条に「御石碑為御用、智頭郡古用ケ瀬村江明廿日より引越被仰付旨」として「石工棟梁 竹村吉右衛門」の名をあげ、用瀬村の

- 南方、古用瀬村から石材を切り出したことが推察される(八代斉櫻墓石)。また同資料、嘉永元年十二月二十二日条(十代慶行)、万延元年三月七日条(義雲院・池田慶徳長男新次郎)などの事例に「用瀬」に石工棟梁らを「引越」させ、長期にわたり派遣している。
- 11 鳥取県立博物館蔵「池田家協議会決議録」
- 12 鳥取藩政資料「家老日記」嘉永七年六月朔日条。ほかに同資料、安政三年五月十四日条(栄岳院・十一代慶栄)
- 13 「家老日記」安政四年五月七日条(瑞徳院・九代斉訓)
- 14 「家老日記」嘉永七年三月十三日条(耀国院・八代斉櫻)
- 15 同慶応元年五月九日条(瑞徳院・九代斉訓)
- 16 「家老日記」嘉永六年四月二十一日条(瑞徳院・九代斉訓)
- 17 同文久二年三月十八日条(栄岳院・十一代慶栄)
- 18 「家老日記」文久二年三月七日条(耀国院・八代斉櫻)
- 19 「家老日記」安政三年六月三日条(真証院・七代斉邦)
- 20 「家老日記」天保九年七月十日条(天祥院・三代吉泰)
- 21 伊藤康晴「池田家協議会決議録にみる近代池田家の家政運営」『鳥取地域史研究』第二十六号、二〇二四年
- 22 「因伯時報」昭和二年十一月二十一日、二面
- 23 「因伯時報」昭和二年十一月二十一日、二面
- 24 鳥取市歴史博物館蔵「吉村哲家資料」
- 25 「因伯時報」昭和五年六月二十日
- 26 鳥取市歴史博物館蔵
- 27 「因伯時報」昭和五年八月二十四日。卷末資料あり
- 28 「華族の肖像」第五卷(鳥取・池田家ほか)毎日新聞社、平成元年
- 29 鳥取市歴史博物館蔵 池田徳貞「最後の鳥取藩主池田慶徳について」
- 30 西館池田家五代藩主池田定常。向島弘福寺の墓は亀趺墓であるが、奥谷池田家墓所の墓塔は、分知家歴代と同様に亀趺墓ではない。
- 31 先祖は三百石の鳥取藩士。明治期の池田家協議会の協議員。現中央大学の創立者の一人で法学博士。文部大臣・司法大臣を歴任兼務し、晩年は東京市長となり大正六年現職で病没。
- 32 『贈従一位池田慶徳公御伝記』五、鳥取県立博物館、平成二年
- 33 成長した輝知(三十一歳没・德国(二十一歳没))の二人は当初は多磨墓所に葬られ(のち改葬)、もう一人の八千麻呂は奥谷池田家墓所八代藩主斉櫻墓の横(No.78)に明治三年に葬られている。
- 34 註1『国史跡鳥取藩主池田家墓所保存整備計画書』
- 35 『贈従一位池田慶徳公御伝記』五、鳥取県立博物館、平成二年。明治五年二月から三月にかけて、池田家は旧領内外にある菩提寺諸寺院に安置されていた位牌や御真影を取り集め、東京に移送遷座させている。
- 36 天保後期頃に作成されたとみられる『法美郡岩倉村田畑地統全図』(鳥取県立博物館蔵)によれば、岩倉村集落の西側の山裾に位置する字尺山にあり。本寺は黄檗宗興禪寺。退転時期は不明である。
- 37 鳥取県立博物館蔵、鳥取藩政資料「家老日記」万延元年十月三日条
- 38 鳥取市因幡万葉歴史館蔵
- 39 「禰神神社事務所資料」477-2 鳥取市歴史博物館寄託
- 40 鳥取藩政資料「家老日記」元文四年八月九日条
- 41 本絵葉書の成立年代は、絵葉書裏面の通信欄の仕様から、明治末年〜大正時代前半期頃と推定される(鳥取市歴史博物館「絵葉書の世界」ほか)
- 42 『国史跡鳥取藩主池田家墓所保存整備計画書』石塔番号No.79。本稿では【墓石総括表】から除外している。
- 43 金子浩之「伊豆石」『季刊考古学』二〇〇七年。金子浩之「江戸へ運ばれた石材と近世史の上の位置」『江戸築城と伊豆石』江戸遺跡研究会、二〇一五年
- 44 加えて近代池田家墓地が鳥取大雲院にあることの意義は大変大きい。

## 鳥取藩主池田家墓所の成立過程【資料編】

〔1〕

### ○池田家御改葬の方々

因伯時報（昭和五年八月二四日・二面）

池田家御改葬の方々 梶川栄吉氏談

先年東都の大震災は江東において惨害最も激しかった。従つて復興後の変化も特に著しき様に思はれる。復興計画は遠慮会釈なく行はれ、素町人は勿論のこと神様仏様まで自由勝手に動かされた。コンクリートの建物、コンクリートの道路、コンクリートの橋や堤防、すべては灰色である。直線的である。人工的である。路幅も広く自動車も自由で便利は便利であるが、曲線的な自然の面白味は少ない。江戸の名所は散々に打こはされ、墨堤の風光も最早広重の絵に見る外窺ふことは出来なくなつた。

牛の御前に接した牛島の池田家御墓所は江戸時代を物語る最後の偉観であつた。弘福寺旧境内を道路が貫通するので普通墓地は先年取払はれ、無数の遺骨は発掘され火葬に附して納骨塔に収められ、重なる人々のみ特設墓地に集められて墓表が残された。有名なる池田冠山侯の銘碑、故奥田義人男の墓石等もその中にある。その際同所に多少池田家御家の方々の御墓も有つたので其は已に奥谷に御改葬に成つた。而し別に一区画を成していた池田家御墓所はまだその儘で有つて、雄大なる耀国院殿の碑石壮嚴なる慶徳公の墓標、華麗なる歴代御夫人方の御墓は燦然として聳えていた。中にも耀国院殿の御墓の如きは今日之を築造するには三万金を要すべしと或石工がいつたとの話。さすがに卅二万石因伯大守の昔を偲ぶに足るべく、同時に江戸名所の一つで有つたが是も弥々この度御取除けの止むなき事と成り、池田侯爵親しく御立会の上、鄭重に御改葬遊ばされ、去八月一日耀国院殿並に輝知侯の御火葬を最後として一切終了の運びと成り、慶徳公以後の方々の御遺骨は多摩池田家の御墓地に、以前の方々の御遺骨は来る廿六日侯爵御令嗣御伴せられて当地奥谷に納めらるゝ事と成つた。慶徳公御墓前にあつた有栖川宮殿下御詠の頌徳碑は特に禰谿神社内に建てらるゝ事と成つた。私は七月卅一日慶徳公並に御主（夫）人寛比売命御改葬の節参拝することが出来、数十年後の今日御神霊を驚かし奉ることの畏さを感じたので有るが而し俗塵に充ちて殺

風景な牛島よりか多摩若しくは奥谷の幽遠なる靈域に鎮まりまします事、御神霊には却て御満足かとも思ふたのである。

この度奥谷に御改葬せらるゝは十五霊位で有るがその中御五つ方が御男子、その他は御婦人方である。御五つ方といふのは旧御法号耀国院殿（今は御神号齊稷命）、英俊院殿（齊衆命）、義峰院殿（道興命）、義徹院殿（道一命）及観夢院殿である。齊稷命は御世代に立たれ、特に英邁な方であつた事は誰も承知している。御世代に立たれた方々は江戸で御逝去の節でも奥谷に御葬送したので有るが、齊稷命のみは何故か江戸御逝去の時御髪を奥谷に納めて御墓を造つたが、御遺骸は牛島に御葬送したので、それ故特に両所に立派な御墓が出来ていたのである。齊衆命は家齊將軍の御子で池田家に御養子とし迎へられ、十五歳まだ世代に立たれぬ内江戸でなくなられた。道興・道一兩名は共に治道侯の御子でも同じく江戸でなくなられた。観夢院殿は齊稷侯の御子。御誕生後すぐなくなられたので御名もついてない位である。

その他の十霊位御婦人方の内、瑤台院殿（龜子命）は吉泰侯の姫君。香樹院殿（八十子命）は重寛侯の姫君で、貞成院殿（浦子命）は齊稷侯の御生母で有るが、他の七霊位は何れも奥方様である。誰も知る如く諸侯の奥方は徳川時代には江戸藩邸に住居の規定で、夫人は一切領国に乗込まるゝ事はなかつた。漸く文久二年諸侯の妻子を国に帰すことを幕府が許したのでこの度御改葬の奥方の内、宝隆院殿のみ御入国があつた外は何れも鳥取の地を踏まれた事のなかつた即ち今度が初めての御入国ともいふべきで、御逝去二百年乃至百年後の今日、鳥取人士は昔の御姫様を初めてお迎へするといふわけである。それ故特にこれ等の方々の御履歴を少々述べて置きたいと思ふのである。

（つゞく）

## 【2】

## ○池田家御改葬の方々(続)

因伯時報(昭和五年八月二六日・二面)

## 池田家御改葬の方々(続) 梶川栄吉氏談

七霊位の内一番に古き方は宝林院殿(敬比売命)で有る。此方は加賀前田家の内でも最も名高き綱紀松雲公として知られた方の姫君で有つて吉泰侯の御主人で有つた。何にしる百万石の前田家からの御入輿といひ派手やかな元禄の次ぎの宝永時代の事として御婚礼の調度その他の事随分綺羅美やかなもので有つた事は当時の記録に窺はれる松雲公の御子として中々聡明な方で有つた様で有る。四十九歳でなくなられた。清涼院殿(律子命)は桑名侯松平下総守の御息女、重寛侯の御夫人で有つた。此方は明和三年正月御入輿後僅に五ヶ月廿三歳で御逝去、まことに御気の毒な方で有る。聖諦院殿(仲比売命)は重寛侯の御夫人で律子命御逝去の翌年御縁組が有つて御三卿の内有名な田安中納言宗武卿の姫君、人も知る白川楽翁侯の姫君で有る。さすがに宗武卿楽翁侯の御筋として賢夫人の名が高かつたが余り御長命で無く廿九歳で逝去せられた。輪光院殿(生子命)は治道侯の御夫人、仙台伊達重村侯の御息女で有る。重村侯は先代萩で有名な鶴千代君綱村侯の曾孫に当る方で有る。元来伊達家と池田家とはこれまでも御縁合であつた。輝政侯の姫君振姫が仙台忠宗侯夫人で、振姫に従ふて伊達家に入った三沢初子は鳥取で生れた人で後に綱宗侯の夫人となり芝居をする鶴千代君の生母で千代萩ではこれを老女政岡として演出してゐる。生子命は又有名な弥姫の御生母で有る。弥姫は島津家に入輿せられ昭国神社に祭られて有る斉彬侯を生まれた賢章院殿として今でも薩摩人はその賢徳を賞讃追憶して措かない。生子命御懐妊の時、治道侯の側室出で後の斉邦侯秀三郎君が有つた。そこで生子命は男子を生まば当然嫡子として世子たるべきで、それでは秀三郎君が気の毒である。願はくば女子を生みたしと日々普門品を誦して観世音に祈られたその効験であつたか、生落されたのが前に述べた弥姫である。その程の方であるから、いはゆる胎教なども行届いたと見え、弥姫の如き立派な方がお生れになつた。而し産後のお肥立は思はしくなく病褥に親しまれ、半年後廿一歳で逝去なされた。才色兼備、和歌の道にも特に御堪能で御臨終の際、夫君及侍臣と詠更はされた御歌なども残つていておいたはしき様に今でも思はるゝ。転心院殿(丞比売

命)は生子命御逝去後治道侯の御夫人となられた方で紀伊中納言重倫卿の姫君で有る。学問に秀で中々卓見の有つた方で法華経に対する疑義を冠山侯に質されたなどの話も有る。四書五経など精通して居られ御子様方に四書は御自身で教えられたといふ。五経に至つては謙遜して時の御儒者に委されたといふ事である。比較的御長命の方で五十七歳でなくなられた。天珠院殿(生子命)は斉稷侯の御夫人で、上杉治広侯の御息女賢君として人の知る鷹山侯の御孫である。されば御入輿の際、鷹山侯は女訓十余条を記して贈られたといふ。貞淑孝順の名が残つているが不幸二十二歳でなくなられた。宝隆院殿(整子命)は実にお気の毒な方で東館仲律侯の御息女。加州様より池田家御養子と成られた慶栄侯の御夫人である。慶栄侯は御相続後僅に二年御入国の途中伏見で御逝去。整子命は十七歳にて未亡人となられ宝隆院と称せられた。諸芸に堪能な方であつたといふ。文久三年鳥取に御帰り、扇御殿に御住居。維新後池田家は神式となられたので院号を止めて紫雲と改称せられた。一時掛出町の御別邸に御移りなされたが、明治七年御上京、浜町御別邸に御住居。十二年四十六歳で逝去なされた。この度又鳥取に御帰り、まことに御同情申上ぐべき方である。

以上を以て御略歴の筆をおくが何れも立派な方々で、しかも御関係筋をたどつて見ると恰も徳川時代を縮図にした様な感があり興趣さらに深きを覚ゆる。奥谷の御霊域は之等の方々を迎へて光彩を添ゆる事層一層我鳥取にとつて甚だ喜ばしき事と信ずるのである。

付記、池田家御代々中、藩祖光仲侯御夫人芳心院殿御墓地、綱清侯御夫人長源院殿御墓地は何れも池上本門寺にあり。宗泰侯夫人桂香院殿のお墓は千駄ヶ谷仙寿院にある。又斉訓侯御夫人泰明院殿は將軍家姫君の事として御墓は増上寺にある。何れも御墓地に支障なき故、別に御改葬などの事はないのである。

## 【墓石総括表】

西谷 (A区)・東谷 (B区)

凡例

	明治5年以前に造立された墓石	昭和5年弘福寺墓地より改葬された墓石
	昭和2年弘福寺墓地より改葬された墓石	昭和期市内寺院より改葬された墓石

No.	被葬者	本枝・代数・続柄	法号	没年月日	西暦	墓石銘	備考	石質	形式 註記
1	池田光仲	初代藩主 (池田忠雄長男)	興禪院殿俊翁義剛大居士	元禄6年7月7日	1693	(表) 興禪院殿故因伯刺史俊翁義剛大居士 元禄六癸酉年七月初七日薨 (裏) 興禪院德政之碑 (碑文略)	64歳・鳥取死去	花崗岩	A-1
2	清弥	初代藩主七男	瑞光院殿廓心道省大居士	享保元年11月6日	1716	(表) 瑞光院殿廓心道省大居士之塔俗名池田 新蔵清弥興禪院第七子享保元年歳次丙申十一月初六日逝	29歳・鳥取死去	花崗岩	A-2a
3	安之助	東3代仲庸男子	靈台院殿桃夭智空童子	宝暦7年2月26日	1757	(表) 靈台院殿桃夭智空童子宝暦七丁丑年 二月二十六日 (裏) 俗姓池田安之助寿三歳	3歳・鳥取死去	花崗岩	A-2a
4	勝之進澄矩	東初代仲澄男子	清秀院殿貞山義節居士	享保6年6月24日	1721	(表) 清秀院殿貞山義節居士之塔 (三面碑文略)	17歳・江戸死去	花崗岩	A-2a
5	邦子	東2代仲央女子	春滅院殿玉梅元洞童女	享保20年2月11日	1735	(表) 春滅院殿玉梅元洞童女之塔享保二十 乙卯年二月十一日逝	2歳・鳥取死去	花崗岩	A-2a
6	澄古	3代藩主義弟	徹心院殿義峯浄透大居士	享保12年10月7日	1727	(表) 徹心院殿義峯浄透大居士塔俗名松平 氏佐渡守源澄古享保十二丁未十月七日逝	34歳・江戸死去 昭和2年、東京向島 弘福寺より改葬 ※墓石は江戸期 からあり	花崗岩	A-2a
7	池田定興	西6代 (西5代長男)	良智院殿慈眼円明大居士	文化4年11月3日	1807	(表) 良智院殿慈眼円明大居士文化四年丁 卯十一月三日 (裏) 松平兵庫源定興	17歳・鳥取死去	花崗岩	A-2a
8	池田延俊	東5代 (西3代二男)	仁厚院殿礼容玄智大居士	明和8年3月7日	1771	(表) 仁厚院殿礼容玄智大居士明和八年辛 卯三月初七日薨 (裏) 松平修理亮源延俊	18歳・鳥取死去	花崗岩	A-2a
9	金三郎央章	東2代仲央二男	華岳院殿秀林義英居士	宝暦2年5月9日	1752	(表) 華岳院殿秀林義英居士之墓宝暦二年 壬申五月初九日卒 (裏) 仲央第二子池田金三郎央章世齡十八歳	18歳・江戸死去	花崗岩	A-2b
10	池田清定	西初代 (初代光仲四男)	桂岩院殿心月浄空大居士	享保3年9月9日	1718	(表) 桂岩院殿心月浄空大居士塔前河内守 朝散大夫源清定享保三年戊戌九月九日薨	36歳・江戸死去 ※「薨」抹消痕あり	花崗岩	A-2a
11	池田定賢	西2代 (西初代養子・ 東初代仲澄四男)	了義院殿自得浄證大居士	元文元年9月7日	1736	(表) 了義院殿自得浄證大居士塔前近江守 朝散大夫源定賢元文元丙辰年九月七日薨	37歳・江戸死去 ※「薨」抹消痕あり	花崗岩	A-2a
12	池田定常	西5代 (西4代養子・ 旗本池田半蔵二男)	停雲院殿冠山兀叟大居士	天保4年7月9日	1833	(表) 停雲院殿冠山兀叟大居士之墓 (裏) 故従五位下縫殿頭入道源朝臣定常天 保四年歳在癸巳秋七月九日丁丑考終 於江戸銚洲賜邸 孝子長門守定保 河三玄書	69歳・江戸死去	花崗岩	A-2a
13	池田定保	西7代 (西6代二男)	讓徳院殿義山全智大居士	弘化4年7月17日	1847	(表) 讓徳院殿義山全智大居士塔前長門守 朝散大夫源定保弘化四年丁未七月 十七日薨	43歳・江戸死去 ※「薨」抹消痕あり	花崗岩	A-2a
14	豊之助就高	西2代四男	聴唱院殿勇巖義豊居士	宝暦3年4月晦日	1753	(表) 聴唱院殿勇巖義豊居士 (裏) 宝暦三癸酉四月晦日池田豊之助就高	17歳・	花崗岩	A-2b
15	和三郎	西5代五男	智春院殿円覚貞鏡大童子	文化6年2月24日	1809	(表) 智春院殿円覚貞鏡大童子 (左) 文化六年己巳二月廿四日	9歳・江戸死去	花崗岩	A-2a
16	池田定就	西3代 (西2代長男)	広雲院殿文英浄芳大居士	寛政2年2月5日	1790	(表) 広雲院殿文英浄芳大居士寛政二年庚 戌二月初五日薨 (裏) 松平兵庫頭定就	67歳・鳥取死去 ※「薨」抹消痕あり	花崗岩	A-2a
17	市之丞庸熙	東2代仲央男子	義中院殿融慧日負居士	宝暦4年正月19日	1754	(表) 義中院殿融慧日負居士 (右) 宝暦 十四甲申年正月十九日 (裏) 公氏松平字市之丞諱庸熙仲央公之季 子十有九利至東武州適粟賀領主喜以 公為嗣明和改元甲申正月十有九日逝 矣葬于武州丸山本妙寺享年二十有二歳	22歳・江戸死去	花崗岩	A-2a
18	池田仲央	東2代 (東初代二男)	岷嶽院殿活空徹玄大居士	宝暦3年正月11日	1753	(表) 岷嶽院殿活空徹玄大居士宝暦三癸酉 年正月十一日 (裏) 松平撰津守源仲央	62歳・鳥取死去	花崗岩	A-2b
19	池田澄時	東6代 (東5代養子・ 5代重寛三男)	真常院殿本覚浄光大居士	天明5年7月21日	1785	(表) 真常院殿本覚浄光大居士天明五年乙 巳七月二十一日 (裏) 松平主計源澄時	17歳・江戸死去	花崗岩	A-2a
20	池田治怨	5代藩主長男	孝得院殿故拾遺本然自性大居士	天明元年7月4日	1781	(表) 孝得院殿故拾遺本然自性大居士天明 元年辛丑七月初四日 (裏) 本藩世子右衛門督源朝臣治怨世寿 十七歳	17歳・江戸死去	花崗岩	A-1
21	若林松子	東8代伸律側室 (10代慶行実母)	寿仙院 (若林松子)	明治5年4月26日	1872	(表) 松子若林氏之墓 (右) 明治五年壬申四月廿六日	鳥取死去	花崗岩	D
22	池田齊訓	9代藩主	瑞徳院殿智覚良温大居士	天保12年5月16日	1841	(表) 瑞徳院殿智覚良温大居士之墓 (裏) 故因幡伯耆国主従四位上左近衛権少将 源齊訓朝臣天保十二年辛丑五月十六日 逝於江戸八月歸葬於此享年二十二	22歳・江戸死去	花崗岩	A-1
23	吉之丞	9代藩主三男	高照院殿夢覚即性大童子	文政9年4月20日	1826	(表) 高照院殿夢覚即性大童子之塔文政丙 戌年四月二十日	2歳・江戸死去 昭和2年、東京向 島弘福寺より改葬	安山岩	A-2c

No.	被葬者	本枝・代数・続柄	法号	没年月日	西曆	墓石銘	備考	石質	形式 分類
24	高沢須摩子	8代藩主側室 (9代齊訓実母)	宝善院殿菱花貞鏡 大禪尼	天保12年11月6日	1841	(表) 宝善院殿菱花貞鏡大禪尼ノ塔天保 十二辛丑歳十一月初六日	江戸死去 昭和2年、東京向 島弘福寺より改葬	安山岩	A-2c
25	鎔姫	12代藩主長女	玉鎔院殿麗質含瑛 童女	明治2年6月晦日	1869	(表) 鎔姫池田氏之墓 (裏) 從二位行權中納言源慶德卿之娘明治 元年戊辰十月廿六日生於鳥取城明治 二年己巳六月晦日天	鳥取死去 (明治元年10月26日誕生)	花崗岩	A-2a
26	七雄麻呂 (七雄丸)	12代藩主七男	義雄院殿久山稚松 童子	慶応3年9月5日	1867	(表) 義雄院殿久山稚松童子 (裏) 通称七雄丸因幡伯耆国主從四位上左 近衛中将源朝臣慶德之七男也慶応三 年丁卯夏六月九日生於鳥取城中同年 秋九月五日夭	鳥取死去 (慶応3年6月9日誕生)	花崗岩	A-2a
27	五緯麻呂	12代藩主五男	義俊院殿英智幻馨 童子	元治元年6月10日	1864	(表) 義俊院殿英智幻馨童子 (裏) 童形某因幡伯耆国主從四位上左近衛 中将源朝臣慶德之五男也元治元年甲 子六月十日生於鳥取城中即日夭	鳥取死去 (元治元年6月10日誕生)	花崗岩	A-2d
28	新次郎	12代藩主長男	義雲院殿桂山道郁 大童子	安政6年9月5日	1859	(表) 義雲院殿桂山道郁大童子 (裏) 通称新次郎因幡伯耆国主從四位上左 近衛少将源朝臣慶德之庶長子也安政 六年己未春正月三日生於鳥取城中此 秋九月五日夭追命準嫡子	鳥取死去 (安政6年正月3日誕生)	花崗岩	A-2d
29	四變麻呂	12代藩四男	義觀院殿勇山元秀 童子	元治元年5月10日	1864	(表) 義觀院殿勇山元秀童子 (裏) 通称四變鷹因幡伯耆国主從四位上左 近衛中将源朝臣慶德之四男也文久三 年癸亥夏五月五日生於鳥取城中元治 元年甲子夏五月十日夭	鳥取死去 (文久3年5月5日誕生)	花崗岩	A-2d
30	池田浪子	12代藩主側室 (13代輝知生母)	(池田浪子)	大正4年4月2日	1915	(表) 池田浪子之墓	74歳・東京(原 宿屋敷) 死去 昭和2年、東京向 島弘福寺より改葬	安山岩	D
31	池田慶行	10代藩主	正国院殿純徳玄明 大居士	嘉永元年6月13日	1848	(表) 正国院殿純徳玄明大居士之墓 (裏) 故因幡伯耆国主從四位下左近衛權少 将源慶行朝臣嘉永元年戊申六月十三 日逝於鳥取城十月葬於此享年十七	17歳・鳥取死去	花崗岩	A-1
32	池田悦子	東9代仲立四女	玉蓮院殿喜悦遺芳 童女	明治3年4月7日	1870	(表) 玉蓮院殿喜悦遺芳童女(右) 于時明 治三年庚午四月初七日(左) 源仲立 公四女悦君享年七歳	7歳・鳥取死去	花崗岩	A-2a
33	池田仲立	東9代(東8代三男)	良徳院殿仁衍智榮 大居士	元治元年6月28日	1864	(表) 良徳院殿仁衍智榮大居士墓 (裏) 故從五位下伊勢守源朝臣仲立元治元 年甲子五月十有命推叙從五位上以功 無足受之而辞同年六月廿八日逝於鳥 取享年二十四十月十九日葬遺骸於此	24歳・鳥取死去	花崗岩	A-2a
34	隣姫	12代藩主養女 (東9代仲立女)	玉隣院	明治3年4月2日	1870	(表) 隣姫君池田氏之墓 (裏) 從二位源慶卿之娘明治三庚午年四月 二日	12歳・鳥取死去	花崗岩	A-2a
35	池田慶栄	11代藩主(加賀前 田齊泰二男)	栄岳院殿穆雲光澤 大居士	嘉永3年5月23日	1850	(表) 栄岳院殿穆雲光澤大居士之塔 (裏) 故因幡伯耆国主從四位上侍從源慶 朝臣嘉永三季庚戌年五月念三日逝於 山城国伏見邸享年十有七九月葬于此	17歳・京都伏見 死去	花崗岩	A-1
36	池田整子	11代藩主夫人	(池田整子・宝隆院)	明治12年5月21日	1879	(表) 池田整子之墓	46歳・東京(浜 町屋敷) 死去 昭和5年、東京向 島弘福寺より改葬	安山岩	D
37	中川房子	東初代仲澄側室 (東2代仲央実母)	春越院殿妙詠月照 大姉	元禄12年正月23 日	1699	(表) 春越院殿妙詠月照大姉之塔(右) 元 禄十二年己卯(左) 正月二十三日逝	中川氏は伏見	花崗岩	A-2a
38	浅井氏(袖)	5代藩主側室	蓮池院殿轡轡性岳 理閨善女	天明元年5月9日	1781	(表) 蓮池院殿轡轡性岳理閨善女(右) 天 明元年辛丑年(左) 五月初九日	鳥取真教寺より 改葬(計画書より) ※竿石割れ(接合)	花崗岩	A-2a
39	(智明院)	5代藩主側室	智明院妙教日清大姉	明和3年5月16日	1766	(表) 智明院妙教日清大姉(左) 明和三丙 戌年五月十六日	鳥取菅能寺より改 葬(計画書より)	花崗岩	A-2a
40	池田綱清	2代藩主	清源寺殿良宗常温 大居士	正徳元年7月4日	1711	(表) 前因伯両州太守羽林次将源朝臣綱清 法名清源寺殿良宗常温大居士正徳元 年七月四日薨寿六十有五	65歳・鳥取死去	花崗岩	A-2a
41	池田仲澄	東初代 (初代藩主二男)	成徳院殿健岩道亨 大居士	享保7年6月2日	1722	(表) 成徳院殿健岩道亨大居士塔享保七年 壬寅六月初二日 (裏) (碑文略・寂潭撰文)	73歳・鳥取死去	花崗岩	A-2a
42	鑑子	3代藩主二女	岫雲院幻心浄無童女	享保5年10月28日	1720	(表) 岫雲院幻心浄無童女之塔享保五庚子 年十月二十八日逝	2歳・鳥取死去	花崗岩	A-2d
43	米子	3代藩主長女	春暁院殿玉梅浄白 大童女	享保4年正月8日	1719	(表) 春暁院殿玉梅浄白大童女之塔享保 [ ] (四己亥年正月初八日逝)	2歳・江戸死去 昭和2年、東京向 島弘福寺より改葬	安山岩 力 棹石部 更新力	B-1b
44	池田定得	西4代(西3代長男)	瑞泰院殿善倫為宝 大居士	安永2年6月3日	1773	(表) 瑞泰院殿善倫為宝大居士安永二癸巳 年六月初三日逝 (裏) 松平大隅守定得	20歳・鳥取死去	花崗岩	A-2d
45	池田吉泰	3代藩主	天祥院殿機運行応 大居士	元文4年7月23日	1739	(表) 天祥院殿故因伯刺史機運行応大居士 元文四己未年七月二十三日薨 (裏) 中大羽羽林次将源朝臣吉泰世寿五十三歳	53歳・江戸死去	花崗岩	A-1b

No.	被葬者	本枝・代数・続柄	法号	没年月日	西暦	墓石銘	備考	石質	形式 分類
46	中村氏	3代藩主側室(4代宗泰実母)	真鏡院殿法警戒觀照如大姉	明和4年10月30日	1767	(表) 真鏡院殿法警戒觀照如大姉明和四年丁亥十月三十日	73歳・鳥取死去 昭和4年、鳥取慶安寺より改葬(計画書より)	花崗岩	A-2d
47	敬姫	3代藩主吉泰夫人	宝林院殿蓮国浄香大姉	元文2年6月28日	1737	(表) 宝林院殿蓮国浄香大姉塔(右)大姉諱敬 加能越三州主従三位参議菅原綱紀女 因伯二州主従四位下左近衛少将兼相模守源吉泰室(左)元文二丁巳六月二十八日逝	昭和5年、東京向島弘福寺より改葬	安山岩	B-1a
48	亀子	3代藩主三女	瑤台院殿普明衍廓大姉	元文5年6月20日	1740	(表) 瑤台院殿普明衍廓大姉塔元文五庚申年六月二十日(右)大姉諱亀因伯二州主従四位下左近衛権少将兼相模守源吉泰娘肥前国主従四位下兼丹後守藤原宗教室	昭和5年、東京向島弘福寺より改葬	安山岩	B-2
49	池田中庸	東3代仲庸(東2代長男)	青嶂院殿雲外弘庸大居士	宝暦8年6月12日	1758	(表) 青嶂院殿雲外弘庸大居士宝暦八戊寅年六月十二日薨 (裏) 松平摂津守源仲庸	38歳・鳥取死去	花崗岩	A-2d
50	池田澄延	東4代(東3代長男)	賢徳院殿英山衍雄大居士	明和6年9月11日	1769	(表) 賢徳院殿英山衍雄大居士明和六己巳年九月十一日薨 (裏) 松平摂津守源澄延	20歳・江戸死去 (実は9月3日死去)	花崗岩	A-2d
51	池田宗泰	4代藩主	大廣院殿義山衍隆大居士	延享4年8月21日	1747	(表) 大廣院殿故因伯刺史義山衍隆大居士延享四年丁卯八月廿一日薨 (裏) 前中大夫拾遺源朝臣宗泰世寿三十一歳	31歳・江戸死去	花崗岩	A-1
52	池田仲律	東8代(東5代二男)	舜徳院殿浄質穆興大居士	嘉永3年3月11日	1849	(表) 舜徳院殿浄質穆興大居士墓 (裏) 故従五位下岐守源朝臣仲律嘉永三年庚戌三月十一日逝於江戸享年四十六葬牛島弘福寺六月歳遺髪於此立碑以為拜位	46歳・江戸死去	花崗岩	A-2a
53	池田仲雅	東7代(東5代養子・5弟藩主重寛六男)	賢量院殿接翁義峻大居士	天保12年6月24日	1841	(表) 賢量院殿接翁義峻大居士之墓 (裏) 故従五位下摂津守源朝臣仲雅天保十二年辛丑六月二十四日逝於江戸享年六十一葬牛島弘福寺九月歳遺髪於此立碑以為拜位	61歳・江戸死去	花崗岩	A-2d
54	池田重寛	5代藩主	岱嶽院殿祥雲洪澤大居士	天明3年10月12日	1783	(表) 岱嶽院殿故因伯二州牧祥雲洪澤大居士天明三癸卯十月十二日薨 (裏) 中大夫羽林次将源朝臣重寛世寿三十八歳	38歳・江戸死去	花崗岩	A-1
55	八十子	5代藩主長女	香樹院殿転英衍華大童女	安永6年8月23日	1777	(表) 香樹院殿転英衍華大童女淑霊(右)大童女諱八十姫 父 因伯二州主従四位下左近衛権少将兼相模守源重寛 母 権中納言従三位源宗武卿之女称仲姫(左)安永六年丁酉八月二十三日	昭和5年、東京向島弘福寺より改葬	安山岩 カ	B-2
56	律姫	5代藩主重寛夫人(桑名松平家)	清涼院殿惠潭智照大姉	明和3年5月6日	1766	(表) 清涼院殿惠潭智照大姉塔(右)大姉諱育勢州桑名城主従四品下総守源忠刻女因伯二州主従四位侍従兼相模守源重寛室(左)明和三丙戌年五月六日逝	昭和5年、東京向島弘福寺より改葬	安山岩	B-1
57	仲姫	5代藩主重寛夫人(御三卿田安家)	聖諦院殿義範如証大姉	安永8年6月2日	1779	(表) 聖諦院殿義範如証大姉塔(右)大姉諱仲姫田安権中納言従三位源宗武卿之女因伯二州主従四位少将兼相模守源重寛室	昭和5年、東京向島弘福寺より改葬	安山岩	B-1
58	池田治道	6代藩主	大機院殿賢翁紹雄大居士	寛政10年5月6日	1798	(表) 大機院殿故因伯刺史賢翁紹雄大居士寛政十年戊午五月初六日薨 (裏) 前中大夫拾遺源朝臣治道世寿三十一歳	31歳・江戸死去	花崗岩	A-1
59	道興	6代藩主四男	義峰院殿雄林如英大居士	文化2年6月17日	1805	(表) 義峰院殿雄林如英大居士塔文化二乙丑歳六月十有七日	昭和5年、東京向島弘福寺より改葬	安山岩	A-2c
60	道一	6代藩主五男	義徹院殿覚性真勇大居士	天保5年3月25日	1834	(表) 義徹院殿覚性真勇大居士塔天保五甲午年三月二十五日	昭和5年、東京向島弘福寺より改葬	安山岩	A-2c
61	佃氏	6代藩主側室(8代斉稷実母)	貞成院殿浄節妙厳大禅尼	文化6年5月12日	1809	(表) 貞成院殿浄節妙厳大禅尼塔文化己巳年五月十有二日	昭和5年、東京向島弘福寺より改葬	安山岩 カ	A-2c
62	生姫	6代藩主夫人(仙台伊達家)	輪光院殿蓮邦浄薫大姉	寛政4年6月7日	1792	(表) 輪光院殿蓮邦浄薫大姉塔(右)奥州仙台城主従四位上左近衛権中将兼左兵衛督藤原重村女因伯二州主従四位下侍従源治道室(左)寛政四年壬子六月七日	昭和5年、東京向島弘福寺より改葬	安山岩	B-1
63	丞姫	6代藩主夫人(紀伊徳川家)	転心院殿実相如幽大姉	文政9年9月2日	1826	(表) 転心院殿実相如幽大姉塔(右)大姉諱丞姫 紀伊前中納言従三位重倫卿之女因伯二州主従四位侍従兼相模守源治道室	昭和5年、東京向島弘福寺より改葬	安山岩	B-1
64	池田斉邦	7代藩主	真証院殿徳心義栄大居士	文化4年7月9日	1807	(表) 真証院殿故因伯鎮主徳心義栄大居士文化四年丁卯七月初九日薨 (裏) 従四位下侍従源朝臣斉邦世寿二十一歳	21歳・江戸死去	花崗岩	A-1
65	三宅氏	6代藩主側室(7代斉邦実母)	聳雲院殿貞室浄操大禅尼	文政12年正月14日	1829	(表) 聳雲院殿貞室浄操大禅尼墓 (裏) 文政十二己丑年正月十有四日	昭和初期、岩倉即心寺より改葬(計画書より)	花崗岩	C-1

No.	被葬者	本枝・代数・続柄	法号	没年月日	西曆	墓石銘	備考	石質	形式 分類
66	松平綱太郎	6代藩主五男道一長男	春馨院殿玉梅智芳大童子	天保4年正月27日	1833	(表) 松平綱太郎君之墓天保四癸巳年正月二十七日(右)春馨院殿玉梅智芳大童子	2歳・江戸死去 昭和2年、東京向 島弘福寺より改葬	安山岩	A-2c
67	賑姫(高子)	6代藩主五男道一二女	皎月院殿梅夢真香大童女	文政5年11月18日	1822	(表) 皎月院殿梅夢真香大童女之塔文政五壬午年十一月十八日	4歳・江戸死去 昭和2年、東京向 島弘福寺より改葬	安山岩	A-2c
68	善之進	6代藩主三男	玉窓院殿法譽庭霜如幻童子	寛政5年12月15日	1793	(表) 玉窓院殿法譽庭霜如幻童子之塔寛政五癸丑十二月十五日	3歳・江戸死去 昭和2年、東京向 島弘福寺より改葬	安山岩	A-2d
69	池田斉稷	8代藩主	耀国院殿峻徳光隆大居士	文政13年5月2日	1830	(表) 耀国院殿峻徳光隆大居士 (裏) 故因伯两国主従四位上左近衛権中将源斉稷朝臣以文政十三年庚寅五月二日逝於江戸葬於牛嶋弘福寺蔵遺髪於此立碑以為拜位	43歳・江戸死去 昭和5年、東京向 島弘福寺より改葬(遺骨)のみ ※墓石は江戸期からあり	花崗岩	A-1
70	演姫	8代藩主夫人(米沢上杉家)	天珠院殿含月真耀大姉	文政元年5月21日	1818	(表) 天珠院殿含月真耀大姉塔(右)大姉諱演羽州米沢城主従四位下左近衛権少将兼兵庫頭藤原朝臣治広女因伯二州主従四位上行左近衛少将兼因幡守源朝臣斉稷室(左)文政元年戊寅正月二十一日	昭和5年、東京向 島弘福寺より改葬	安山岩	B-1a
71	池田清直	西8代(東7代仲雅八男・西7代養子)	円徳院殿仁山道義大居士	安政5年8月6日	1858	(表) 円徳院殿仁山道義大居士 (裏) 安政五戊午年八月六日	47歳・江戸死去	花崗岩	A-2d
72	池田清緝	西9代(東8代仲詭長男・西8代養子)	覚性院殿崙山元勇大居士	文久2年8月24日	1862	(表) 故従五位下左衛門佐源清緝墓	20歳・江戸死去	花崗岩	A-2d
73	池田斉衆	8代藩主養子(徳川家斉十二男)	英俊院殿雄山全機大居士	文政9年3月9日	1826	(表) 英俊院殿因伯世嫡故拾遺雄山全機大居士文政九丙戌三月初九日	昭和5年、東京向 島弘福寺より改葬	安山岩	A-1
74	(観夢院)	8代藩主長男	観夢院殿閃光如電大童子	文化12年正月23日	1815	(表) 観夢院殿閃光如電大童子ノ墓文化十二年乙亥正月二十有三日	昭和5年、東京向 島弘福寺より改葬	安山岩	A-2c
75	郁之進	8代藩主四男	秋光院殿幻夢知覚大童子	文政13年7月24日	1830	(表) 秋光院殿幻夢知覚大童子之塔文政十三庚寅年七月二十四日逝	2歳・江戸死去 昭和2年、東京向 島弘福寺より改葬	安山岩	A-2d
76	賢子	8代藩主三女	智賢院殿妙音真静大童女	文政2年9月11日	1819	(表) 智賢院殿妙音真静大童女淑霊(右)大童女諱賢父因伯二州主従四位上行左近衛権少将兼因幡守源朝臣斉稷母羽州米沢城主従四位下左近衛権少将兼兵庫頭藤原朝臣治広女(左)文政二年己卯九月十一日	2歳・江戸死去 昭和2年、東京向 島弘福寺より改葬	安山岩	B-1b
77	栄子	8代藩主二女	暁雪院殿智幻正了大童女	文化12年正月18日	1815	(表) 暁雪院殿智幻正了大童女之塔文化十二乙亥年正月十有八日	2歳・江戸死去 昭和2年、東京向 島弘福寺より改葬	安山岩	A-2c
78	八千麻呂	12代藩主八男	池田八千麻呂	明治3年8月15日	1870	(表) 池田八千麻呂之墓(左)明治三年庚午八月十五日	鳥取死去(明治3年3月23日誕生)		D